

見守ってくれる親切

宮崎県 赤江中学校 3年 哥丸 華奈

私には小学2年生の妹がいる。明るくて活発で、学校では人気者らしい。でも、そんな自慢の妹は、1年生のとき不登校気味だった。学校が怖い、妹は私にそう打ち明けた。妹を助けたい。そう思った私だったが、なすすべはなくて、母が妹を学校まで送っていくのをただ見ることしかできなかった。

初めは、母といっしょに行けて妹もうれしそうだった。でも、次第に学校に行きたくないと言うようになり、不吉な予感が私を支配していった。妹にこれ以上不安な思いはさせたくないと思うほど、何もできない自分にやるせなさを感じるようになっていた。

でも、救いがなかったわけではない。通学路に立って安全に児童が登下校できるように活動している見守り隊の方々だ。彼らがあいさつしてくれるとき、決まって私は笑顔になっていた。でもそれは一瞬だけ。またすぐに、妹の心配からやってくる不安な気持ちが、私の心を暗くした。

ある日のこと、母が妹を学校まで届け、家路に着こうとする途中、いつもの交差点に立っている見守り隊のおばあさんに声をかけられたそう。なんだろう、と母は思うと、おばあさんは労いの言葉とともにお手紙を母に渡した。

家に帰った母は、すぐにその手紙を開いた。そこには「毎朝ご苦労さまです。娘さんのこと不安でしょうけど大丈夫、きっとお母さまの気持ちは娘さんに伝わっていますよ。いっしょに頑張りましょう」と書かれていた。それを読んだ母は涙が止まらなかったらしい。「心がふっと軽くなった」、母はこう言っていた。

次の日から、母は妹の前ではいつも笑顔でいるように努めていた。不安は伝わる、そう母が教えてくれた。あのおばあさんにも再会し、母は涙ながらにお礼の気持ちを伝え、抱えている不安を告白した。これまで家族にしか話していないことを、あまり関わりのない人に話すことは、いつもの母なら憚られたと思う。

でもそのときの母には、そんなことは関係なかったのだろう。不安を、悩みを聞いてくれる、共感してくれる、それだけで母はどれほど救われただろうか。母にとってどれほどおばあさんの存在はありがたかったことだろうか。

それから間もなくして、妹は不登校を克服した。きっと母や家族、そしておばあさんの思いが伝わったのだろう。母は改めておばあさんに手紙を書いた。感謝、私の心にはただそれだけしかなかった。ある人はおばあさんの行為を、単に小さな親切と呼ぶかもしれない。でも、私たち家族にとって、それは例えようのない大きな大きな親切だったのだ。

今日もおばあさんは子どもたちを見守っている。私も負けまいと、私なりの小さな親切を今日も、そしてこれからも探していくつもりだ。